

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520225

研究課題名(和文) フランスにおけるボードレーン以降の詩的言語について

研究課題名(英文) The poetic language after Baudelaire in France

研究代表者 井上 直子 (INOUE NAOKO)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80314441

研究成果の概要(和文)：フランスにおける、ボードレーン以降の詩人たちの言語観を明らかにしつつ、言語学における詩学の役割を考察した。従来、言語学において、詩は伝達を目的としない言語と見なされていた。これに対し、20世紀後半の詩人たちにとっては、詩の言語学はさらに新しい発展を見せ、読み手と詩人だけが対峙する場としての言語行為の言語学となっている。指示対象が詩人にとって「いま・ここ」にしか存在しない、という20世紀の詩的言語学はさらに発展し、詩の世界は「いま・ここ」にしか存在しない読み手によってのみ支えられたものとなっている。以上の視点の変化を、さまざまな詩人の言語観をもとに示した。

研究成果の概要(英文)：

We analyzed the poetic language after Baudelaire in France, in particular, the role of poetic in linguistic. Poetry is considered as language whose object is not communication. For the poets, the poetic language makes a place where the poet and a reader meet. Things exist for the poet of 20<sup>th</sup> century, « now and here ». This poetic world is developed and it appears for a reader who reads « now and here ». We examined this change through thoughts of many poets.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：仏文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：詩的言語

## 1. 研究開始当初の背景

国内外を問わず、文学史としての詩については、フランス文学における散文詩の研究、ボードレールからシュルレアリスムまでの詩人紹介、あるいは、詩人たちによって書かれた試論紹介などがなされてきた。しかし、これらは詩作品と詩人を紹介することが目的であり、詩人と言語の取り組みについて、単なる列挙ではなく言語哲学、美学の観点に基づいた分析がされたことはなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく分けて3つある。第一に、ボードレール以降、第二次世界大戦後の詩人たちにいたるまで、彼らが詩の言語についてどのような考えを持ったのかを分析すること、第二に、20世紀に言語学との関わりから生まれた「詩学」について考察すること、第三に、詩的言語と「詩学」を関連づけることである。

これまでのフランス文学研究は、作家研究が中心であり、それだけに文学の流れを俯瞰しつつ、一つのテーマをめぐって、さまざまな作家、詩人の思想を探る、という研究はなかなかされてこなかった。また、されたとしても、概論のレベルにとどまることが多かった。詩的言語の問題は、詩のみならず、言語哲学の問題も含んでいるのだが、それを系統立てて分析する研究は、これまでにまだなされていなかった。そこで本研究では、「言葉と音」、「言葉と事物」という二つの流れを中心に、それぞれの詩人の言語観を読み解くことにした。前者については、19世紀以降に生まれた「芸術のための芸術」と詩的言語との関連を考察する。後者については、20世紀以降に発展した言語哲学の中に詩的言語の問題を位置づける。

このように、言語哲学、美学の観点に基づいて詩的言語について分析するという点で

本研究は全く新しい試みであり、この研究が完成すれば、フランス文学研究に重要な視点を提供することができるのではないかと考えた。

## 3. 研究の方法

まず、ボードレール、マラルメ、ランボー、ロートレアモン、クロード、ヴァレリー、アポリネール、シュルレアリストたち、コクトー、シャール、ミショー、ポンジュ、ボヌフォワ、ジャベス、メシヨニックなどの詩人たちの言語観について、それぞれに考察する。

次に、20世紀以降、フランス文学において生まれた「詩学」という新しいジャンルについて考察する。「詩学」が誕生するきっかけは、19世紀の終わりに、スイスの言語学者、フェルディナン・ド・ソシュールが、言葉の持つ音と意味との関係について新しい説を打ち出し、言語学が大きな転回を遂げたことだ。これと同時に、言語学と詩を関連させた考察が、ヤコブソン、ジュネットなどによってなされるようになった。そこで、彼らの思想をたどり、それぞれの目指したところを明らかにする。

さらに、本研究で扱った詩人たちの言語観を、「詩学」というジャンルと関連させ、このジャンルが発展していく歴史的流れの中に位置づける。

## 4. 研究成果

1) 2007年度は、ボードレール、マラルメ、ランボー、ロートレアモン、クロード、ヴァレリー、アポリネールの言語観について調べた。これまでの研究では、それぞれの詩人の作品分析、それぞれの言語観を取り上げたものはあっても、彼らの言語への取り組みの中で、共通する点を挙げたものはない。この点を探ることで、芸術哲学の中に詩的言語を位置づける、という

新たな視点を示すことができた。

ボードレールは、詩を書く喜びだけで作り上げられた作品を純粹詩と考え、こうした作品の中に感覚と言葉とが響きあう一つの宇宙を作り上げようとした。このような詩的宇宙についての考えはマラルメ、ヴァレリーにも見出される。また、ランボーは自分の感じとったものを完全に表現しうる言語を作ることを目指し、ロートレアモンは言葉と言葉の結びつきに意外さを追求する。これらの詩人に共通するのは、言語を記号としてではなく、作品の中でその場だけの意味を持つものとしてとらえようとする態度である。このように、19世紀から20世紀前半にかけての詩人たちの言語観は、芸術の自律性という問題を反映しており、これはプラトン以来古典主義まで続いた芸術のミメシス性の崩壊を告げるものである。

以上の考察のうち、ヴァレリーに関するものを、論文『メルロ＝ポンティとヴァレリー（『テクストの生理学』、著書 Valéry : « l'apparaître des choses » にて発表した。

2) 2008年度は、シュルレアリストの詩人たちに始まり、コクトー、ポンジュ、ボヌフォワ、シャールの言語観について分析した。シュルレアリストの詩人たちについては、特にブルトン、アラゴン、エリュアールを中心に扱った。彼らの言語観に特徴的なのは、言葉が「何かを指す」「何かを意味する」ことを嫌い、詩からメッセージ性を排除するということである。ただし、アラゴン、エリュアールについては、この点のちに彼らが飛び込むことになるレジスタンスの主張と合わないことから、やがてブルトンと袂を分かつことになるのだが、少なくともある時期までは、彼らの主張は、

言葉と指示対象が次第に結びつかなくなるという現象につながっていく。コクトーは『職業の秘密』において、事物が言葉によって慣習化される以前の特殊な感覚について述べる。このような観点は、ボヌフォワにも共通してみられる。つまり、この二人の詩人は、言葉によって概念化できない、「いま・ここ」にしかない「この事物」と向き合うことを強調しているのである。また、ポンジュは、言葉ではなく、事物の側に立つてものを見る姿勢を述べており、やはり「事物」への愛着がうかがえる。シャールには、点字による看板についての詩篇があるが、これは言葉を絵画化してとらえる試みと言え、他のシュルレアリストの詩人たちとは違う角度から、言葉から意味を引きはがそうとする姿勢の現れと捉えられる。これらのことを示すことで、これまで個々に論じられてきた詩人たちに、ある程度共通する言語観がうかがえることが指摘でき、ある程度の時代性を示すことができたと思われる。

3) 2009年度は、ミショー、ジャベス、メショニックについて、それぞれの思想を、その言語観を中心に考察した。また、詩人たちの言語観と、言語学や詩学との関連を探るため、特にヤコブソンの思想をまとめた。20世紀後半の詩人たちにとって、詩の言語学は、ソシュールを祖とする言語記号の言語学ではなく、言語行為の言語学になりつつある。これはすでにシュルレアリスムの詩人たち、ボヌフォワやコクトーなど、昨年度までにすでに分析した詩人たちの思想にも共通していることである。言語行為の言語学とは、東京大学名誉教授竹内信夫が、メショニックの『詩学批判』のあとがきにおいて記しているように、バンヴェニストの言う「意味とそれ

を支える主体が問題の中心に置かれている言語学」である。つまり、詩を言葉で書かれた対象ととらえるのではなく、詩を読むこと、書くことの中で生まれてくる具体的な経験だけを対象とするのである。ここでは、詩をテキストとして客観的に分析する態度は否定される。これに対し、ヤコブソンは、ソシユールの流れを汲み、『言語学と詩学』において、詩を機能的側面から分析している。当初の計画では、ヤコブソンの思想を知ること、詩というものを言語学者がどう扱ったかを考察する予定であったが、実際に調べてみると、詩学はもっと遠く、深い地点に到達している。2009年度の考察では、20世紀の詩人たちにとって、詩作品は単に言語によって書かれたものであることをやめ、詩人と読み手が対峙する場として存在しているのではないか、という可能性を示した。

4) 3) に示唆した、言語学と新たな詩学とのずれについて深めるために、2010年度は、伝統的な詩学の流れを確認し、ジュネット、ヤコブソンの詩学について分析することから始めた。この二人は、いずれも詩を言語の機能という観点から分析している。ジュネットは『フィギュール』において、詩的言語を「隔たりのある言語」と表現する。そして、伝達を目的とする日常言語からは隔たったところに詩的言語があり、その言語の状態は夢の状態にも似ている、と言う。ここで注目したのは、「夢」の状態がいかに従来の言語から隔たっているかということである。ジュネットの言う「隔たり」の中では、言語の持つ記号性は全く切り崩され、意味を失っている。そこで、伝統的な詩学と詩人の言語観を、「夢」をキーワードに関連づけ直した。夢とは理性ではとらえられない状態に遊ぶことである。シュルレアリスムの詩人たちも、知

性の詩人という色眼鏡で見られがちなヴァレリーも、この「夢」と詩を結びつけて考察している。ヴァレリーによれば、夢とは肉体を介さない状態であり、その点で、時間、空間の中に身を置かない独特の状況であるとも言える。この視点は、時間性を超越したものの、という点で、ボンヌフォワやコクトーがそれぞれの言葉で説いたように、対象が詩人にとって「いま、ここ」で「一度きり」現れる状態にも通じている。このように、本年度は、さまざまな詩人、批評家が行ってきた、詩的言語における言葉と対象の結びつきについての分析を考察しなおし、それらを時間論との関わりでとらえ直した。指示対象が詩人にとって「いま・ここ」にしか存在しない、という20世紀の詩的言語学はさらに新たな展開を見せ、こうした詩の世界は「いま・ここ」にしか存在しない読み手によって支えられたものとなっている。こうした分析の中から、ヴァレリーに関するものの一部を『ヴァレリーと時間』という論文で発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1) 井上直子、メルロ＝ポンティとヴァレリー(『テキストの生理学』、朝日出版社、501頁-513頁、2008年2月)

2) 井上直子、ヴァレリーと時間(ガリア、大阪大学フランス語フランス文学会、第50号、175頁-184頁、2011年3月)

〔図書〕(計1件)

Naoko INOUE, Valéry : « l'apparaître des choses » ANRT, Lille, 2007年12月

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 井上直子 (INOUE NAKO)  
大阪教育大学・教育学部・准教授  
研究者番号 : 80314441

(2)研究分担者 ( )

研究者番号：

(3)連携研究者 ( )

研究者番号：